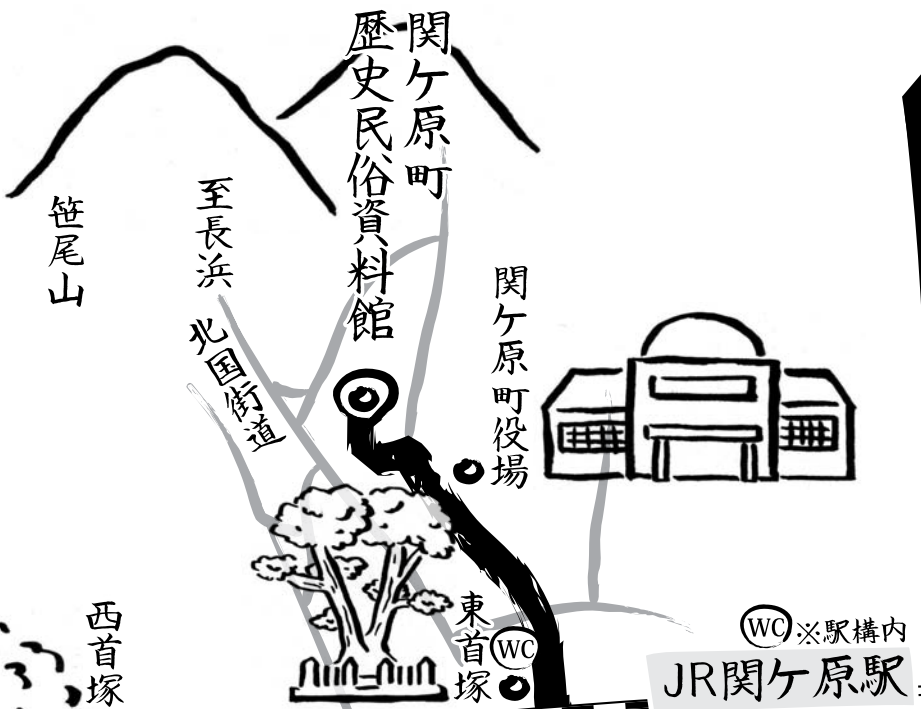


関ヶ原宿 ― 今須宿
壬申の乱、源平争乱、関ヶ原合戦ゆかりの地をめぐる



一、無難禅師誕生地

無難禅師（一六〇三―一六七六）は、愚堂国師の教えを受け、臨済宗妙心寺派の高僧となりました。江戸に置いて寺の建立、再興に努め大名をはじめ人々から大変尊敬されました。

二、脇本陣跡

現在も、当時の面影を残す門が建っています。門の右手には「至道無難禅師生誕地」と彫られており、日本禅宗の祖の生誕地とされています。宿屋の番台から宗祖となつた、珍しい人物だとされています。

三、本陣跡・スタジイ



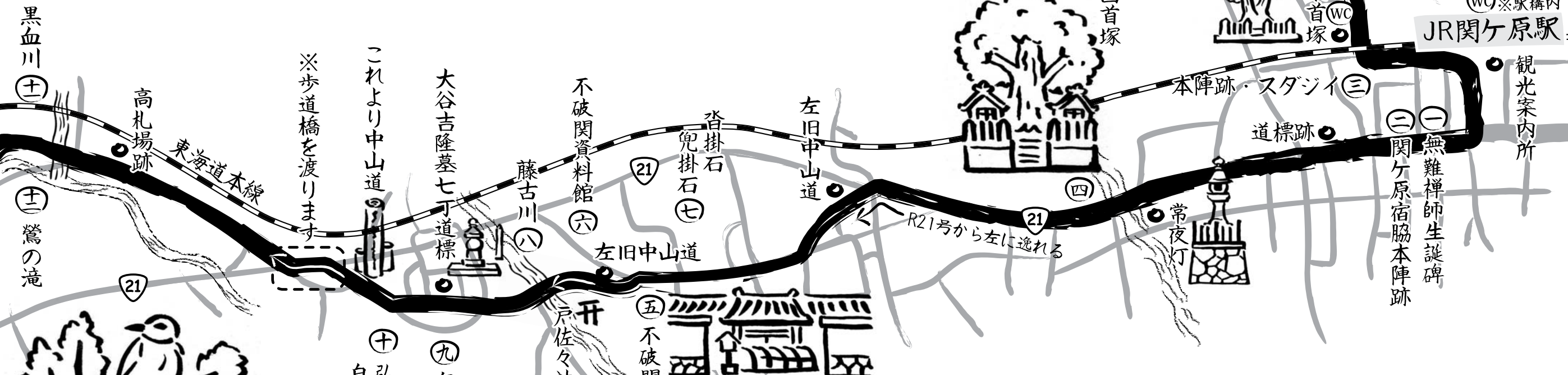
関ヶ原合戦戦死者数千の首級を葬った塚で、江戸時代に、この上に十一面千手観音や馬頭観世音の堂が建てられ、民衆の手によって供養されてきました。東首塚と同様に当時の領主の竹中重門がつくったもので、東海道線の線路を敷設する際には大量の白骨が発見されたといえます。昭和六年、国の史跡に指定されています。

四、西首塚

六七二年に勃発した壬申の乱では、この付近を境に東方の大海人皇子（天武天皇）と西方の友皇子（弘文天皇）が対峙し合戦となりました。翌年、戦いに勝利した大海人皇子はこれを要所として「不破の関」を置きます。東山道の美濃不破の関は、東海道の伊勢鈴鹿の関、北陸道の越前愛発（あらち）の関とともに、古代律令制下の三関の一つとして重要視されました。平安時代以降には、多くの歌や紀行文に関跡の情景が描かれています。

秋風や 藪も昌も 不破の関

芭蕉



六、不破関資料館

関所跡から出土した土器類、関所全景を復元した模型などが展示保存されています。

七、沓掛石・兜掛石

壬申の乱の時、大海人皇子が兜を置き、沓を脱いだ場所と伝えられます。茶畑を奥に入るとかなり大きな石が祀られています。

八、藤古川（関の藤川）

壬申の乱には、川を挟んで東に大海人皇子軍、西に大友皇子軍が陣しました。以後、東の松尾村は武天皇を祭り、西の藤下、山中村は弘文天皇を祭って氏神としています。平安以降は、歌枕として知られ多くの文人墨客に親しまれました。

みのゝ国 関の藤河 たえずして君に仕えん 万代まで
― 古今和歌集 ―

九、矢尻の井

大海人皇子軍の兵士が水を求め、矢尻で掘ったものと伝えられています。

十、弘文天皇御陵候補地

自害峰の三本杉
千三百年余り前の、壬申の乱に破れた大友皇子（後の弘文天皇）は大津の山前で自害されました。その御首は、不破の野上に移され、大海人皇子（後の天武天皇）の御実験に供され、この丘陵に葬られたと伝わっています。三本杉はその目印としてここに植えられました。

十一、黒血川

壬申の乱では、この川の西岸に近江軍（大友皇子）、東岸に吉野軍（大海人皇子）が布陣し激戦を繰り広げます。その時、この山中の川の水が両軍兵士の流血で黒々と染まったと言われ、その後、川の名も黒血川に変わり、激戦の様子を今に伝えています。室町期の文学者で関白太政大臣でもあった一条兼良は次のような歌を詠んでいます。

白波は 岸の岩根に かかれども 黒血の橋の 名こそかはらね

十二、鶯の滝

水量が豊富でひんやりと涼しげな空気の中に、鶯の鳴くこのあたりは、難所であつた今須峠を越える旅人たちの憩いの場所でした。古くは東山道の宿駅として、人や荷物で賑わつたと言われています。



大海人皇子

十 弘文天皇御陵候補地 自害峰の三本杉



裏面へ

十三、常盤御前の墓

平治の乱で、牛若丸の母である常盤御前が都を落ちて東国に下る途中、山中の宿で土賊に殺害されたのを里人が隣れんで墓を建て吊つたと伝えられています。墓のそばには芭蕉の句碑があります。次のような句が記されています。

義朝の 心に似たり 秋の風

十四、今須峠

このあたりはゆるい坂が続きますが、ここ今須峠では、冬は積雪が多く、中山道の難所の一つとされています。今でも関ヶ原という冬は雪で新幹線が遅れることで知られています。この付近は、日本海側から吹き込んだ季節風が伊吹山にぶつかって大雪になるのだそうです。

十五、青坂神社

境内に徳川家康が腰掛けたと言われる石があります。関ヶ原の戦いで石田三成から西軍に勝利した家康は、その足で近江の佐和山城へと軍を進めます。途中、今須宿の伊藤家で一休みした家康が庭で腰掛けたのがこの石だと言われています。明治になって本陣が廃止された後に青坂神社の境内に移されました。



十六、妙應寺

正平十五年（一三六〇年）に、今須領主長江重景が母である妙応尼の菩提を弔うために峨山禪師（総持寺二世）を招いて開山したのが始まりとされる県下で最も古い曹洞宗寺院です。宝物館には、町の重要文化財の文書をはじめ、当地出身の喜田華堂筆の縁起絵巻などが展示されています。



伊吹山

黒血川 (十一)

(十二) 鶯の滝

常盤御前の墓
芭蕉句碑

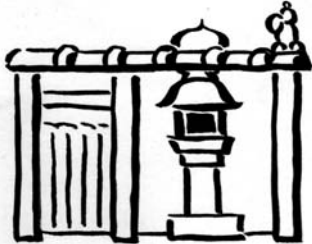
※踏切注意!

十七、問屋場 (山崎家)

荷車が入る広い玄関や吹上、苔むした土間が当時の姿そのままの貴重な建物です。明治二年（一八六九）の今須騒動の時の傷あとが柱やかまいに残っています。

十八、金比羅大権現永代常夜灯

京都の三河屋という問屋が大名の荷物を運ぶ途中、その荷物を失い、金比羅さん願をかけたところ、今須宿にあることがわかったことから、そのお礼として問屋場の前に建てられたと伝えられています。その後、現在の場所に移されました。



十九、車返しの坂

南北朝時代の公家で北朝四代にわたり天皇の摂政・関白を務めた二条良基は、歌人であり連歌の大成者として知られています。その良基、不破の関が荒れ果てて、板の底から漏れる月の光に風情があると聞き、わざわざ都から牛車にのってやってきました。ところが、これを聞きつけた関守が見苦しい姿を見せてはならぬと屋根を葺き替えてしまったところ、それでは興味がなくなると、一首の歌を残して車を返し京に戻ってしまったそうです。

ふきかえて 月こそもらぬ 板びさし
とくすみあらせ 不破の関守

二十、寝物語の里

かつて、近江と美濃の国境は細い溝でした。その溝を挟んで両国の番所や旅籠があり、壁越しに寝ながら隣国にいる人と話が出来たことから寝物語という名が生まれたといわれます。平治の乱の後、源義朝を追ってきた常盤御前が隣り宿の話し声から家来の江田行義と気づいて奇遇を喜び、義朝の安否を聞くことができました。また、源義経を追ってきた静御前が義経の家来の源造の声を聞き、平泉まで一緒に連れて行ってほしいと頼んだという伝えがあります。このような場所ですから、寝物語は中山道の名所として、広重の浮世絵にもなり、歌にも詠まれています。

ひとり行く 旅ならなくに 秋の夜の
寝ものがたりも 忍ぶばかりに

太田道灌

歌枕の里 関ヶ原 歴史・文芸散歩 その一

関ヶ原宿—今須宿
壬申の乱、源平争乱、関ヶ原合戦ゆかりの地をめぐる



常盤御前

※国道を渡ります
横断注意!

一里塚跡

※サインに注意!

もんぜんばし

本陣跡

今須警察官
駐在所

金比羅大権現永代
常夜灯

真宗寺

問屋場跡

法善寺

今須八幡神社逢拝塔

東海道本線

関ヶ原

車返しの坂

寝物語の里

関ヶ原



関ヶ原宿―野上―野上の松並木・班女の観音堂

一、歴史民俗資料館

関ヶ原合戦の大パノラマがあり、ドキュメンタリー風の解説を聞くことができます。関ヶ原軍記の写本、武将たちの兜、慶長大鉄砲、家康禁制、陣羽織、火縄大筒、ほら貝、火縄銃など関ヶ原ならではの歴史遺産をご覧いただくことができます。二階の中山道展示室では、古文書や高札などをみることもできます。

二、本陣跡・八幡神社

現在は、本陣の庭があった場所に八幡神社が建っており、古木スダジイが往時を偲ばせてくれます。

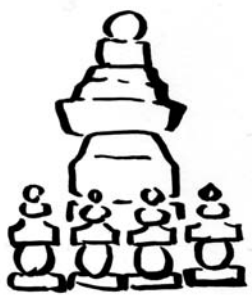


三、無難禅師誕生地

無難禅師（一六〇三〜一六七六）は、愚堂国師の教えを受け、臨済宗妙心寺派の高僧となりました。江戸に置いて寺の建立、再興に努め大名をはじめ人々から大変尊敬されました。

四、与一の宮

鎌倉時代（健保六年、一二一八年）の創建で、祭神は関原与一。与一は、南北朝時代の関ヶ原の郷土で壘田開発のために用水「与一堀」に取り組みました。与一の最期について、京都の粟田口で急ぐ与一の馬が源義経の袴の裾に泥水を跳ね上げたことで争いとなり、与一は従者とともに義経に討たれと言われ、その地を蹴上げと呼ぶというお話しが伝わっています。



五、十九女池（つづらいけ）

時折、闇夜に腕を借りに来る十九、二十歳くらいの美女は、腕を返して来る毎になぜか生臭いにおいがします。家の老人は大蛇の腕借伝説を思い出し、腕の糸底に縫い針を刺して貸してやるとその日限り美女は来なくなりしました。しばらくして美女が本陣に現れ、遠方に行くことになりましたのでと言い、形見に横笛を置いていきました。その横笛は今八幡神社の宝物になっており、池のことを人々は、十九池（つづらいけ）と呼ぶようになりました。

六、野上の松並木

沿道沿いの松並木は、夏の日差しを避け、冬の防風・防雪の役目を果たし、旅人たちを助けていました。また、戦が起った時には、この松を切り倒して砦を作る目的もあったといわれています。樹齢三〇〇年あまりの松が立ち並ぶ姿が残っているこの地は、中山道の中でも貴重な場所です。

伊富岐神社

一の鳥居

野上の七つ井戸

しゃもじ塚（平塚常の墓）

秋葉神社

野上の松並木

六部地蔵公園

班女の観音堂

桃配山、徳川家康最初陣跡

野上の七つ井戸

与一の宮

十九女池

与一の墓

野上の七つ井戸

秋葉神社

野上の松並木

班女の観音堂

野上の七つ井戸

七、六部地蔵公園

一七六一年頃、この地で亡くなった「六十六部」（修行僧）を地元の人々が祀ったものだといわれています。「歯痛地蔵尊」とも呼ばれており、歯痛を治すことでも知られています。

八、桃配山

壬申の乱の折、不破の村人たちは大海人皇子を励ますために、特産品であったヤマモモを献上しました。喜んで皇子が不破の大領を呼び、このモモを兵士の皆に配りたいと頼みます。皇子から配られたヤマモモで数万の兵士の士気は高まり、大勝を果たしたといわれています。関ヶ原の戦いの折、その大海人皇子の故事にならって、徳川家康もここに、最初の陣を置きました。その際、現在の六部地蔵堂のあるあたりが桃配山への登り口となっており、家康率いる東軍は中山道を通り、着陣したといわれています。

九、秋葉神社

宝暦十年（一六七〇）三月に宿場全域は強風に煽られて焼け野原になりました。旗本竹中の領主の示唆督励もあり、復興は急速に進みました。これを期に道幅を二倍に広げ、さらに中央に水路を設け、水路の両脇に梅や桃、柿などを植えて防火対策を講じました。宝暦十三年に宿場が復興すると、秋葉神を迎え北山に祀って毎年煙火を奉納しています。

十、しゃもじ塚

平安中期、東国の平忠常が国に反抗したため、朝廷は、源頼信を討討史に任命し忠常の乱を鎮圧し降伏させます。都への護送途中、病となった忠常に野上の村人が食物をしゃもじにのせて差し出すと、食物としゃもじを一緒に口に入れて、そのまま亡くなったことから村人は塚を築いて弔ったといわれます。

十一、野上の七つ井戸

街道筋の井戸は、「野上の七つ井戸」として親しまれ、江戸時代に中山道を旅する人たちののを潤しました。現在も、つるべ式の井戸から実際に水を汲むことができます。※飲み水ではありません。

十二、伝説「班女の観音堂」

謡曲にもなっている、「班女」になぞらえた、平安時代の伝説です。京の都から吉田少将が東国に下る途中、長者の館に泊まり、長者の娘、花子と深い契りを結びました。花子は少将との子、梅若丸を産み、その子が少年になったので、東国の少将の許に送りました。しかし、何の便りもないので、花子も東国に下って捜し求めていると、梅若丸はすでに隅田川のほとりで亡くなっていることを知りました。少将は梅若丸が下ってくる前に、すでに都に戻っていたのです。花子は驚きと悲しみで気が狂い、少将からもらった扇子を抱いて野上に帰り、子の供養のために観音堂を建て、祀り、狂気のうちに亡くなりました。それがこの観音堂です。

